

転生無双^{なんて} 大層^{なこと}、できるわけ ないでしょう!

公爵令息が家族、
友達、精霊と送る仲良しスローライフ

2

Daidaikichimaru Kouunji
幸運寺 大大吉丸

Illustrator
月森もち



ルイ

ラインハルトと行動を
ともにする伯爵家令嬢。
研究が大好き。

ドライアド

世界樹から地上に
遣わされた木の精霊。
マイペースな性格。

ラリー

ラインハルトが溺愛している弟。
兄顔負けなくらい頭脳明晰で
いつも落ち着いている。

アルバート

ラインハルトを幼少期から
支える護衛の一人。
礼儀作法に厳しい。

マーク

ラインハルトの護衛であり
兄貴的存在。
お調子者なところがある。

ラインハルト

公爵家長男に転生した
本作主人公。
知らないうちに規格外の
能力を獲得していたが、
制御に困っている。

登

場

人

物

紹

介

第一話 研究棟づくり

女神ライフによって、チートスキル持ちにテキトーに転生させられた俺——ラインハルトは、父のエドワードからの唐突な依頼で、辺境の地マッキンリーに赴任ふにんすることになった。

マッキンリーに着くと、そこを治めていた役人のアランからインフラの整備を始めた三つの課題を教えてもらい、いよいよ開拓に乗り出すことに。

山に拠点を築いたり、護衛の一人であるマークの婚約者騒動を乗り切りながらなんとか仮拠点を作り上げたのだった。

翌日、俺は友人のルイにプレゼントすると約束していた研究棟を建設する前に、父上のところへ相談に来ていた。

今は本題の相談に入る前に、転移の魔道具を使って俺が作り上げた『どこへでも行けるドア』をラッキー公爵家の屋敷のリビングに取り付けているところだ。

マッキンリーに来てからすぐに取り付けるか迷ったが、自分たちだけだったら転移魔法で飛んでいけるということもあり、仮拠点ができるまで後回しになっていたのだ。

一応、公爵家の屋敷と辺境を繋げるということで、セキュリティ面を心配したのも遅れた理由の一つだ。

まあ……わざわざ、屋敷への侵入を目的にあんな辺境まで行く人はいないと思うが、念には念である。

頑張つて結界も張りまくつたし、やすやすと侵入されることはないだろう。

「よし！ これで設置完了っつと」

「どうとうこんなものまで作ってしまいましたか。うちのひとでなしが」

「ああ……ん……？ ラ、ラリー。どこでそんな単語を覚えてきたの？ ……つて。お前たちしかないか」

俺がそう言つて後ろで控えている護衛のマークとアルバートにジトーツとした視線を送ると、二人は首を横に振った。

え？ 違うの？

再びラリーに目を向けると、「いや、教えてくれたのは父上です」という言葉が返つてきて、怒るに怒れなくなつた。

まったく……何教えてるんですか？ こんな小さな子どもに。

そもそも、あなたのほうが人に無理難題も言うし、よっぽどひとでなしでは？

そう思ったが、リスクが高すぎるから、口にするのはやめておいた。

「マーク、アルバート疑つてごめん。でも、これもお前らの日頃の行いが悪いせいでもあるから。そつちも反省して」

「全然謝罪に聞こえないのは気のせいでしょうか？」

「むしろ俺たちのせいにされてるな。でもいじられるのが好きなんだろう」

「ですよ。今だつて、いじられておいしいポジションにいるとか内心思ってるでしょうに」

「おいこら。思つてないわ！ そういうとこだぞ。そういうとこ。まったく……ま、何はともあれこれでラリーもいつでも来られるな！」

「はい！ 兄上、ありがとうございます！」

お、ひとでなしという言い草はともかく、辺境にいつでも行けるようになったことには好感触な様子。これは結構頻繁に来そうな雰囲気だな。

だったら、ラリーのために作ろうと計画していたアスレチックも早めに完成させて、みんなで遊ぶか。やるべきことが増えたな。

ドアの設置が終わわり、俺は本題だった公爵家の研究員の辺境への派遣について切り出す。

父上は俺の説明を聞くと、一つ頷いてから言った。

「ふむ。研究棟の建設か。仮拠点も作り終わつたみたいだしいいよ」

「やった！ ありがとうございます」

「その代わり、利益につながるような研究をすること。分野はなんでもいいからね。こちらから研

究してほしいものがあつたら依頼も出すよ。優秀な研究員をわざわざ派遣するんだから、それくらいはしてもらわないと、という感じだ。まあ、彼女なら大丈夫だろうけど」

「そうですね。分かりました。伝えておきます」

父上がそれくらいシビアな要求をしてきそうなのは想定内だった。

この世界、教育レベルはそこまで高くないし、研究員の数はまだまだ少ない。

そんな状況で父上がお金と時間をかけて育てた貴重な人材を派遣してくれるというのだから、見返りを求められるのは当然のことだろう。

主に研究するのは、ルイになるだろうがぜひとも頑張つてほしい。

マッキンリーに戻った俺は、研究棟を建てることの許可をまずアランさんにもらいに行つた。

規模の小さい町では、トップの役人が建物関係の許可を出すことになっているからだ。

ゆくゆくは、この屋敷も広くして、アランさんの負担を減らせるように管理部門を細分化したいなとは思っている。そのためにはまず、産業の育成の他に、防衛面での不安も解消しないといけない。

まだまだ、長い道のりだ。

そんなことを考えながら、俺はアランさんの屋敷を後にして、仮拠点に向かった。

「おかえり、ラインハルト」。研究棟の設計図できたよ！」

「ただいまルイ。ありがとう。無事許可ももらったし、早速建て始めようか」

「お、やったー！」

「まずは科学実験用の施設から建てようかな」

「分かった。僕にも何か手伝えることあったら教えて！」

「そうだなー……だったら、ルイには魔法陣学の先生を呼んでほしいかも。ほら、魔法陣を研究する装置は専門の人に起動してもらふ必要があるから。空いている人を確保してもらえと助かる」

「了解！」

研究と一口に言っても、その対象によって、必要な設備は全然違う。

ルイと色々相談した結果、俺たちは魔法陣学、科学、そして料理の三つに分野を絞って研究していくことに決めた。

料理を選択したのは、自分の趣味の意味合いが大きい。

ルイと一緒にいる時間をもっと取るためになるべく同じ建物にいる必要があると考えたら、その時間を好きなことの研究にあてられるのが理想だからだ。

それに、ジェフから依頼を受けて売ったものの中で一番利益を出しているものが、レシピ本だったというのも理由の一つだ。

この話を聞いて、異世界の人間が料理に関心を持っていると把握したし、もし料理開発ができれば父上が言っていた利益も出しやすくなる。

ちなみに、レシピ本の中身は、前世の記憶を頼りに、この世界でまだ世に出ていない料理の作り方をまとめたものだ。

「ラインハルト。言われていたもの揃えといたぞ」

「お、マーク。ありがとう」

「きっかけ……さすがラインハルト様。いくらルイ様のためとはいえ、相変わらず、やることが大胆です」

「本当にな。こんな高級品を建築のために使うなんて、言い出したのがラインハルトでなければ正気を疑うぞ……ラインハルトの発言だから納得したけど」

「待て……それって気のせいではない、常日頃の俺が正気の沙汰ではないと言われていている気がするんだが」

「それを気のせいだと思う選択肢があると思っている時点で、さすが我が主人という感じだな」

「本当ですねぇ」

「おいつ」

二人にツツコミを入れながら、俺はマークが持ってきたものに目を向けた。

そこに置かれていたのは——大理石だった。

ルイがどんな研究棟にしたいか考えていた間、暇だった俺はマッキンリーに寄り、研究に必要なものをできるだけ買い集めていたのだが、これはその道中で見つけたものだ。

目にした瞬間、思わず一目惚れしてしまい、俺はちよつと……いや、かなり贅沢な発想だが、研究棟を大理石で建てようと思つたと考えた。

あれ？ 急な思いつきとはいえ、今考えたらマークの言う通り、この時の行動は正気の沙汰ではなかったかもしれない。

ま……まあ、だけど、誰しも衝動買いする時なんてそんなものだろう。うん。

研究棟が本邸より豪華になってしまわないかとも思ったが、これを見れば俺が婚約者を大切にしていることが一発で伝わるだろうというねらいも込めている。

気持ちも大事だが、物理的な贈り物も同じくらい大事だという考え方は、この国の貴族社会では常識である。

ただ、ルイへの贈り物には以前から度々悩んでいて、これまでだとカステラを送ったくらいだった。

宝石類などは、ルイは興味がなかったようで断られていたし、ようやく価値のあるものを渡すことができたのは個人的に嬉しい。

側近たちに正気を疑われながらも、ジェフの商会との商売で稼いでいる利益二カ月分を注ぎこんだ甲斐があったというものだ。

「ふー。ようやく、外観は仕上がったか。うん……いい感じだ」

大理石を切り出し続けて、一週間で経過した。

外観の建築作業は終わり、今はルイと二人で仕上がりをチェックしている最中だ。

「ふあー。細部の装飾までこだわっていて、壮観だね。ふふっ。こんな立派な建物をありがとう」
マッキンリーに来てから、記憶にある中だとルイの笑顔を見るのは初めてのことである。

う……俺はこんな彼女を長い間放置していたのか……と罪悪感を覚えてしまう。

と同時に、過去は変えられないし、これからもつとルイを大切にしていこうと決意した。

「まだまだ。外観だけじゃなく内装も大事だからね。ここからがスタートだよ」

「そうだね。ところで、魔法陣学の先生にはアポイント取ったよ。明後日の午後に来るって」

「そうか。だったら、明日はマーチャルトにある本屋に行きたいかな。ちようど今、マークとアルバートたちが本棚をたくさん作ってくれているし、研究棟なら本はたくさんあったほうがいいだろう？」

「うん。もちろん。家から持ってきた本もあるけど……まだまだ足りないと感じてたんだ。それに、マーチャルトの本屋ってラインハルトが持っている禁書を買っていた場所でしょ？ だったら、まだまだ、お宝がたくさんあるはず！」

たしかに。あの怪しい本屋のお婆さんだったらまだまだ隠し持っていそうだな。

翌日、俺はルイ、マーク、アルバート、それから三体の精霊を連れて、予定通りマーチャルトの

怪しい本屋を訪れていた。

「こんにちは」

俺が挨拶すると、店主のお婆さんが隣にいたルイを見て言った。

「ヒッヒッヒ!! いらつしゃい。坊や。そちらのお嬢さんは？」

「あ、ああ……よろしく、お婆さん。僕はルイと申します。ラインハルトの友人です」

「おお。そうかい。見かけによらず、やるねえ。てっきり、その性格だと一生ぼっちかと思ってたけども。ヒッヒッヒ……!」

「ぐはっ……」

お婆さんのあんまりな直球発言に俺はダメージを受け、思わず呻いた。

ぐう……何も間違えてないから言い返せないけど、失礼すぎる。

「実際貴族じゃなかったら、異性の友人なんてできてないと思うぜ!」

「ぐっ……」

従魔の精霊の一人、ルーカスにもそう言われてしまった。

ですよねえ。自覚はしているけれど、言葉にされるときついものがあるな。

「そうかな？ 僕はラインハルトなら誰かしら相手ができていたと思うけど。特殊な趣味に理解があるのは助かるし」

え……!? ま、まじか。ル、ルイ優しいな。

俺が思わず頬を緩めると、頭に衝撃が走った。

「あいでっ」

「研究室に必要な本を探しに来たのが目的よね？ 早く終わらせて、ご飯食べに行きましようよ」

「ラトリアの言う通りだぜ！ 俺も腹減った！ お婆さん。早く案内してくれ！」

「欲しいのは魔法陣学、料理、それから科学の本。なるべくたくさん」

ソフィアがお婆さんに話しかける。

「はいよ。相変わらず、ものすごい力を持った精霊連れてるねえ……つと、それなら、魔法陣学はこの階のここからこまで。料理と科学は地下だねえ」

「え!? ちっ……地下があるんですか?」

「そうさね。マイナーな本は地下に置いてあるさね」

お婆さんがそう言うと、ゴゴゴゴゴ……という音がして、地下への階段の入り口が開いた。

何というか、ものすごく怪しい。

力を奪われて、閉じ込められるなんてことは……ないと思うけど。

「な、なるほど……だったら、ルイとラトリア、ソフィアはここに残ってくれ。俺とルーカス、マークとアルバートで行ってくる」

俺の言葉に全員が頷き、お婆さんの後に続いて俺たちは地下への階段を降りていった。

コソッ

「マ、マーク。本当に大丈夫ですかね。この地下って?」

「実は俺も思っていた。もしも……大丈夫ではなかった場合どうする? その……閉じ込められて実験の材料にされたりとか」

「ま、まあ……お婆さんに悪意はなさそうだし、そんなことにはならないでしょ。たしかに、閉じ込められそうな雰囲気のところとお婆さんだけ」

若干怯^{おび}えている様子のアルバートとマークを元気づけるように俺はそう言った。

「どうして分かるんですか?」

「勘かな」

そんな会話をしているうちに、山のように本が置かれた部屋にたどり着いた。

お目当ての料理や科学の本が所狭しと並んでいる。

「ほらな。人体実験の場所ではなかっただろ?」

「あ……ああ」

俺の言葉にマークたちが安堵の息を吐く。

「アンタら。さっきから失礼すぎだよ」

コソコソ話していたつもりだったけど、ばっちり聞かれていました。

「んんー!! これも、あれもうめえ!! おい、ラインハルト! 向こうに行こうぜ!」

必要な本を無事買い揃えた俺たちは本屋を後にして、昼食がてら市場に食べ歩きにやってきた。
「あ、おいっ！ ルーカス！ 今回はお忍びで来てるんだから、あんまり、目立つような真似は……！」

「う、うわっ！ せ、精霊だ!! ……あれ？ この精霊見たことあるぞ？ ……ということはもしかして、あそこにいるのはラインハルト様!?」

「えっ!? まじかよ？ 本当だ！ ラインハルト様だ！」

「ラインハルト様！ いらっしやっていたのですね！ これ持っていてください！」

あーもう。お忍びで来ているのを知られたくないからコソコソ行動していたんだけど……仕方ないか。

やれやれ、人気者は辛いもの。

「何というか、色々とか哀想なやつだよな。お前……」

「本当は、キヤーキヤー言われたかったのね……友達いないから」

「憐れみが深い」

ルーカス、ラトリア、ソフィアの精霊三体からそれぞれグサツとくる言葉を投げかけられた。

「ム、ムキーーー！ 友達いなくて、何が悪い!! 何も困ってねえからな!! そ、それはそれとして、この人だから、どうすればいいんだ。このままだと……」

俺たちが戸惑っていると、向こうから大急ぎで、商人のジェフが来た。

「ぜえ……ぜえ……ハア……ハア……ラ、ラインハルト様。本日は来る予定があるとは伺ってなかったような気がするのですが？」

「ああ……やっぱりこうなるよな。忙しいのに、わざわざすまない。今日はお忍びで来ていたんだから、出迎えは不要だ」

「そ、そういうわけには参りません！ ラインハルト様に何かあったら一大事ですから!!」

「だ、大丈夫だ！ 俺は強い！ いざとなったら自分で自分を守るから、護衛は不要だ！」

「ラインハルト……」

俺がきっぱり言っていると、ラトリアに呼び止められる。

「ん？」

「嘘はいけないわよ？ 余計、かわいそうに見えるわ」

「憐れみが深い」

「う、嘘じゃないもん！」

ラトリアとソフィアが同情するような視線を向けてきた。

そんなに俺って信用ないのだろうか。

「ぐ……実際、魔法で自分の身を守るのは事実だろ？ ……加減できないけど」

「ラインハルト様。それは、自分で自分の身が守れているとは言いません。やはり、護衛をつけさせていただきます」

ジェフに真つ向から諭され、俺は項垂^{うなだ}れる。

たしかに自分の身と引き換えに、町を巻き込んだら意味ないか。

「ぐう……分かった」

「ですが、強がらずに周りの意見をしつかり聞いているその態度は、素晴らしいですね」

いや、俺が言い合いに弱すぎて、言い返せないだけなんだが……とは口が裂けても言えない。

「言わなくても顔に出ているわ」

俺の心を読んだツツコミを入れるラトリアを見て、ジェフが苦笑しながら言葉を続ける。

「あはは。しかし、ご立派なのは本当だと思います。これは、ここだけの話ですが、身分が高い方だと、他者の行為や意見を聞き入れられる寛容さがある人は少ないのです。酷い方だと、待ち合わせに一分遅れただけで、ピリピリしてしまいますから……」

「あ、あはは」

俺はジェフさんの言葉に乾いた笑いを返した。

それは、ジェフさんが悪いのでは？　と思うのは、前世から染みついてしまっている感覚なのだろう。

この世界、時間には結構ルーズなのである。

それこそ、十分の遅刻でもまあまあ、いいだろう……むしろ、身内で開催されるパーティなどに行くときは、時間ピッタリだと、まだ準備できておらず、気まずい思いをする……ということが

多々ある。

総じて、この世界ではジェフさんが今言ったようなカッチリしている人たちのほうが変な目で見られることが多い。文化の違いってやつだ。

「ところで、みなさま。残りの時間は責任を持って案内させていただきますので、ご安心ください。お探しのものや、いいお食事屋さんも紹介いたしますよ」

「よっしゃー！」

「ぜひお願いします」

マークとアルバートが喜んで応えた。

……って、そこは主人の俺が応えるところなんだけど。

ま……まあ？　今さっき俺は寛容だつて言われたし、こういう従者の振る舞いも許してやるか。

「……やつぱり、ラインハルトって、色々あれだよな」

「ええ……あれね」

「アレみが深い」

「せめて、アレが何かぐらいいちやんと言つてえ!?」

こうして、俺たちはグルメ旅を楽しんだのだった。

「なっ……!!」

「なになっ……!」

「な、何これー!?」

戻ってきて早々、俺たちを出迎えたのは、建てた覚えのないお屋敷だった。

荘厳で、息を呑むほど美しい。

「あらまあ。すごいわね」

「へ……? はは……夢? ほっぺをつねってみよう。あいでっ! やっぱ現実か……というか、

本当に、なにこれー!?」

「テンション高すぎだぞっ! ラインハルト!!」

マーク。その言葉、そっくりそのまま返すぞ。

圧倒的な存在感に俺たちが戸惑っている、マツキンリーで仲良くなった古代竜——エー君がこちらに来た。

『おー、お主ら……帰ってきたか? ……ん? どうした? 何を惚^{ほう}けておる? さっさと中に入れ』

「あつ、エー君! その前に聞きたいことがあるんだけど、あれ、誰が建てたの?」

『ワシじゃ。まあ、建てたのではなく、他のところから持ってきただけじゃがな』

「えっ……!? ええー!! いや、待て待て。持ってきたことは、盗んだの? だったら、返さない」と

『嫌じゃ』

「はっ……?」

『これはのう。元竜王の神殿で、竜に住み心地が良いようにできておるから、ワシが使いたくてわざわざ苦労して持ってきたのじゃ。心配しなくても、大丈夫じゃ。お主らも自由に改造しても良いぞ……ワシのものになったからのう。多分じゃが』

「へー。そ、そうか。なら、まあ……いいのか?」

最後のほうはやけにボソボソ言っていてうまく聞こえなかったが、どちらにせよ、エー君にこれだけはつきり言われたら、強く言い返せない。

無駄に神秘的なのは気になるが、立派な屋敷をもらえた考えると、むしろ感謝していいのかもしれない。

『ともかく、みんな、中に入れ。きっと気に入ると思うぞ』

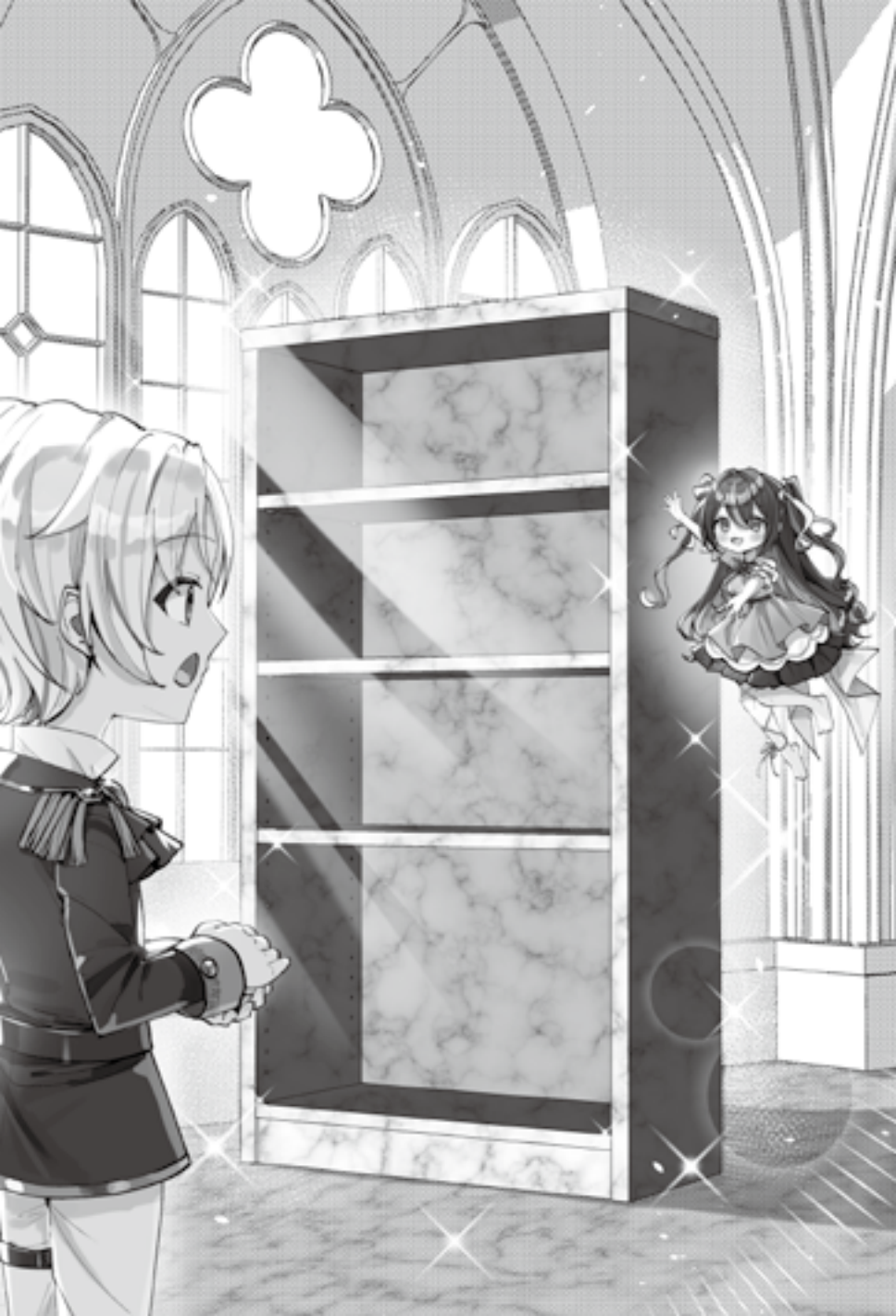
「あ、ああ。エー君」

『うむ?』

「その……あ、ありがと」

『うむ。これから、お世話になるからな。これくらい当然じゃ』

どう考えても当たり前でもらうような代物ではないと思うのだが……そこは古代竜のスケールと
いうことで流してしまっても良いのだろうか?



「わあ。中也綺麗だね！」

「うん。これは……すごいな。神々しい。計算しつくされた美という感じだね」

「ああ。美しいな」

「ラインハルト様。これ、大丈夫ですか？ 来賓客の度肝を抜くというか……この建物がきっかけで戦争が起きてもおかしくないくらい豪華絢爛（じゅうかけんらん）ですよ」

「ああ……たしかに。それについては、後で考えるよ。今すぐ結論が出るものでもないだろうし……今はとりあえず休んで、それから図書館を作る。目の前のこと優先だ」

「そうですね。では、私はアラン様とエドワード様に報告だけしておきます。一応、責任者に確認しておいたほうがいいと思うので」

「分かった。ありがとう」

それから、すっかり休養を取り終えた俺たちは、図書館作りを開始した。

「ラインハルト。見てこれ。いい感じ」

しばらく作業を続けていたら、ソフィアが作ったものを俺たちに見せてくれた。

「おー。さすがだね」

「ああ。大理石の建物に大理石の本棚。まさか、こんなものができるとはなあ。ありがとうソフィア」

普段は俺を弄り倒すことしかしていないので忘れがちだが、精霊たちはみんな、神が遣わした存在だ。ラトリアは創造神マテリ、ルーカスは武神スキル……そして、ソフィアは鍛冶神クラフトの眷属である。

だから、物作りにおいてソフィアに勝るものはこの中にはいない。

結局、この図書館の内装もほとんど全てソフィアが作ってくれた。とてもオシヤレで落ち着く雰囲気だ。

今度、仮拠点の内装も誰かに頼もうかと思っていたのだが、どうやらその手間はいらなくなるのかもしれない。

俺たちが、そんな感じでのほほんと和んでいると、外から怒号が聞こえてきた。

『このドロボー!!』

「「……!!」」

あれ？ 俺らなんかやっちゃってました？

大きな声の正体が気になり外に出ると、立派なドラゴンがいた。

銀色の鱗に、エメラルドグリーン目の。エー君にそっくりな容姿だ。

その様子を見て、俺はドラゴンが来た目的を察した。

「古代竜殿。落ち着いてください！ あなたがお探しのエンシェントドラゴンはこちらにいますから！」

俺は迷わず、友人ならぬ友竜を生贄に差し出す。

すまん。エー君。グスン……この死は無駄にはしない。

「縁起でもないこと言わないでくれる？ 別に死んでないわよ。このまま無事かは分からないけど」

ラトリアさん。あなたのその言葉のほうが問題あります。

『む……？ その声、人間か。どうせ、彼奴の被害者だろう。この度はうちのバカ親父が失礼したほんつとすまん』

「え!? お、親父？」

想定外の言葉に俺たちが驚いていると、エー君がやってきた。

『なんだ。お前……わざわざ、こんなところまで来て』

『でたな。クソジジイ！ よくも俺の神殿を盗みやがって!!』

『ぬ？ だって、お前は今使っておらぬだろう。それに、この神殿はお前のものでもあるが、親の俺のものでもあると言っている』

『なわけあるかっ!! やって良いことと悪いことがあるだろう！ これは俺が建てた神殿だ！ ジジイにこんなセンスあるわけないだろ!!』

あ、やっぱりエー君のもののじゃなかったのね……と思ったが、口を挟むのは控えておいた。今にも喧嘩になりそうな雰囲気だからだ。

『俺は親なのだ。息子のものは親のもの。親のものも親のもの』

「ひでえ」

『ヤンキーの屁理屈やめてくれよ、親父。そんなことやっても、親父が頭おかしいのは変わらないんだから。俺は他人の前で親父の恥を晒したくない』

……もうだいぶ晒しているので、手遅れですけど。

三千年間、人間を乗せるために、代わりに石を載せて練習してた話も聞いちゃったし……まあ、ここであえて蒸し返す真似はしないけど。

とりあえず、なんか言っとかなくちゃ……

「あの……？ エー君？ さすがに、盗みは良くない……良くないと思うなあ。うん。親しき仲にも礼儀ありだし、ちゃんと元々あった場所に帰して来てくれると、ありがたいなと……俺は思う……かな？ うん」

俺が言葉を選びつつ、エー君を説得しようとする、ラトリアたちが苦言を呈してきた。

「言い方がヘタレ」

「おどおどしすぎだ、ヘタレだな」

「どヘタレ」

三人から口々に言われ、俺は胸のあたりを押さえる。

「ぐはっ……！」

『むむ……！ ラインハルト。お前だけは……お前だけは友達だと思っていたのに！』

『もうやめろ！ 親父!! なんだその返し！ 恥ずかしすぎて死ぬ！』

なんだろう。目の前にいるのは、古代竜のはずなんだけど……親との関係性といい、妙に共感できてしまった。

「どうか、エー君？ 元竜王の神殿って言っていたよね？ 嘘……ついていたの？ 俺も友達だと思っていたのに……！」

『う、嘘ではないぞ。我が息子は元竜王なのだ。何も間違っではおらぬ』

「騙そうとは……した？」

『う……ううむ。したか、してないかで言えば、ふうううむ』

「はつきりせい!!」

『む！ しました』

『親父……もうやめて……こんな子どもに叱られてるなんて恥ずかしすぎる』

「息子さん……なんかごめんなさい」

『いえいえ。うちの父がお騒がせしました……』

こうして、エー君の嘘は秒でバレたのだった。

というか、この神殿はどうするの、この後。

俺は一拍置いて、エー君に言う。

「返そう。この神殿」

『嫌じゃ』

「盗みは犯罪です」

『その法律は人族のものだろう？ 竜族の法律はワシが決めたことじゃ』

『父上が法を定めたのは事実だから、俺もなんも言えない……』

「えっ……そうなんだ……って、いやいやここで折れたら話がややこしくなるからやめてよ。神殿返してほしいんじゃないの？」

『あ、すまぬ……しかし、ここまで、父上が頑^{かたく}なだと、説得できなさそうだからな。俺は帰ろうかなと思う』

「えっ？」

『神殿は新しいの建てれば良いだけだし、そこまでの執着はない。俺も忙しいし……じゃ、また今度、暇な時に来るからな。ほなな』

「えっ!? ええええ……?」

ほななゝって……なんだったんだ今のは？

「この適当具合、親子そっくりね」

「う、うん。たしかに」

俺たちがポカーンと放心していると、ルイが走ってやってきた。

今まで公爵邸に魔法陣学の先生を呼びに行ってもらっていたのだが、転移扉をぐり抜け、戻ってきたらしい。

「ラインハルト。先生がいらっしゃったよ!」

「あ……うん。分かった」

「……? なんかあった?」

「いや……ね」

「大丈夫よ。ちょっとした事件はあったけど、ルイが心配するほどじゃないわ」

「そうそう」

「……? 分かった」

うん。俺も何も見なかった。

今までの出来事は記憶からさっぱり消そう。

『ふあ。ラインハルト。話は終わったし、神殿はもらえたしワシは酒飲んで寝るぞ』

当事者のエー君が欠^{あぐひ}伸しながら言う。

オー! エー君! これぞ、まさにフリーダム……!

第二話 鈍感すぎる男

「じゃーん。こちらが、魔法陣学の先生。リーアだよ！」

「はじめまして。リーアですわ。その……不束者ふつかもものですが、よろしくお願いいたしますわ！」

リーアと呼ばれる女性は、黒髪黒目の美人さんだった。

……あれ？ 誰かに似ているような？ と思ったが、顔には出さないよう努める。

「はじめまして。ラインハルトⅡラッキーと申します。こちらは、護衛のマークⅡベルンハルトとアルバートです。今日はよろしくお願いいたしますわ！」

「ふふっ。噂は存じておりますわ。こちらこそよろしくお願いいたしますわ！」

……隠しきれないくらい所作が高貴だな。

同じ年くらいで、おそらくウチかマークと同じくらいのレベルの貴族令嬢だろうか。

でも、貴族の知り合いが少なすぎてどこの家系かよく分からないや。とりあえず、愛想よくしておこう。

「準備が出来次第始めるから、研究室に先に行つて。案内はマークとアルバート、よろしく。僕はちよつとラインハルトに話があるから。すぐ後を追うよ」

「あ……ああ。分かった」

「え……ええ。かしこまりました」

若干困惑しつつ、マークとアルバートがリーアを連れて去っていく。

珍しいこともあるもんだなと、俺がその後ろ姿を見送っていると、ルイがコソツと耳打ちしてきた。

「で、ラインハルト。先に言うておくけど、あの人の正体に気づいても、手出ししたらだめだよ」

「あつ……やっぱり俺の知ってる人？ 雰囲気はそんな気がしたけど……で、結局誰なの？」

「えっ……？」

「えっ……？」

目を丸くして驚くルイに、俺は尋ね返す。

「はー。ラインハルト。鈍い男は嫌われるわよ」

ラトリアにまで呆れられてしまったが、まったく思い当たる節がない。

「もう行こうぜ！ ルイ」

「う、うん。そうだね」

結局答え合わせはないまま、ルイは精霊たちと先に研究棟へ向かっていった。

「ちよ、ちよつと待って〜！」

俺はルイの後に続きながら、リーアの正体を考えるのだった。

「それでは、開始したいと思いますわ」

「うん。よろしく」

リーアは優雅な所作で、魔法陣が書いてある紙を道具にセットする。

魔法陣を研究するためには、魔法陣を起動するための専門の道具が必要で、最初の起動は、魔法陣に詳しい専門の人が行わなければならないきまりがある。

そういった専門の人は、大体が王立学園を優秀な成績で卒業した研究員で、今回招いたリーアもしっかりその資格を持っていた。

彼女の場合、年齢的にマークと同年くらいなので、飛び級で学園を卒業したことになるわけだが……十歳くらいの少女が、高校を卒業して、研究職に就くとは世界は広い。

ボオオオオオ！

そんなことを考えていると、突然彼女が魔法を発動した。

俺も伊達に精霊たちに鍛えられていないから分かる。

相当繊細な魔力のコントロールができなければ、あの領域に達することはできないだろう。

「ラインハルト。魔法はああやって使うのよ？ 適当に魔力を込めて打っていても当たるものではないの。いい加減分かってほしいものだよ」

「わ、分かってるよ。それくらい！ というか、俺だって別に適当に打ってるつもりはない！ 才

能がないだけで！」

「威張って言うことじゃないわよ。それ」

「ぐぬぬ……それに、正確に言うところ洗礼の儀までは俺も結構才能あったんだからな。たまたま今ないだけで」

「過去の栄光ね。精進しなさい」

ぐう……ラトリアに言い負かされてしまった。

大人になるまでには、絶対魔法を上手く扱えるようになるう。

「ここをこうして……と。はい、完成ですわね」

俺とラトリアで舌戦を繰り返していると、リーアが立ち上がった。

「えっ!? もう終わったの？」

「はい。わたくし、作業は結構早いほうなのですわ」

「そ、そうなんだ」

驚きと同時に、俺は訝しんだ。

おかしい。これだけの実力がある魔法陣学の研究者に、こんなに早く、アポイントを取りつけられるなんて。

いくらルイの知り合いだからと言っても、こういった職の人は予約が三カ月くらい埋まっただけもおかしいはずなのに。

「ラインハルト」

「ん？」

「あなた。やっぱり鈍感ね」

「へっ？」

またしてもラトリアに呆れられてしまった。

魔法陣学の作業が終わると、リーアが口を開く。

「ラインハルト殿。わたくしは、もう少しここにいたいのですわ」

「あつ。それでしたら、えつと……何か見たいものとかありますか？　こう……調べたいこととか」

そう言うと、リーアはキョトンとしてこちらを見た。

この顔。まさかこの子まで、まだ、わたくしの目的に気づいていなかったのかしら？　……とか思っていないよな？

「ラインハルト。お前、そういう部分はちゃんと察するんだな！」

「えっ？　ということは、おつ、思ってたんだ」

ルーカスの言葉にショックを受ける。

これは気づかないほうが幸せだった。

「うーんと。そうですわね……では、護衛の方々の訓練を見たいですわ」

「……！　それくらい別に構いませんけど……あまり、面白いものではありませんよ？　本当にいいんですか？」

「ええ。構いませんわ！　むしろ、ここに来た本当の目的はこれと言っても過言ではありませんもの」

これが目的……ということは国の軍事関係者か？　こんな少女が！？

いや、これだけの魔法の実力なら、あり得るかもしれない。

ルイの知り合いだから、悪い人ではないとは思うけど……この人の正体、本当に思い当たらないな。

「では。案内いたしますね」

「よろしく願いますわ」

俺たちはリーアに頼まれた通り、マッキンリーに新しくできた騎士団の訓練場まで案内した。

この訓練場は、多くの人々が安心して暮らせるように父上が建てたものだ。

「あそこが、騎士団の訓練施設です」

「まあ！　素晴らしいですわね。もしよろしければ、マーク様の模擬戦が見たいですわ」

「ええ。もちろん！　さっそくご用意いたしますね」

「……」

アルバートとリーアのやり取りを観察していると、マークが声をかけてきた。

「どうした？ ラインハルト？」

「いや……」

なんとなくだけど、リーアとルイ、アルバートの空気感が最初と比べて穏やかになっている。まるで事情を色々察して、仲良くなりました……みたいな雰囲気だ。

当然、人の心を読める精霊たちはこの状況を把握しているわけで、もしかしてリーアの正体に気づいていないの俺だけでは？

「では、行ってくる」

「うん。行つてらっしゃい」

「頑張ってくださいまし」

「頑張ってください」

マークが模擬戦に向かうのを、ルイ、リーア、アルバートが見送る。

「が、頑張つて」

慌てて俺が声をかけた時には、マークは一人の騎士と向かい合っていた。

「ラインハルト様。マーク様は強いのですか？」

「う、うん。あいつはうちの騎士団の訓練施設を飛び級した天才だ。騎士で魔法が使えたから。リーア程ではないかもしれないけど」

「まあ！ さすがラインハルト様の護衛になるだけありますわね」

「そうですね。しかし……マークをラインハルト様が護衛にすると聞いた時は随分揉めましたね」俺とリーアで話していると、アルバートが口を挟んだ。

「そうなのですか？」

「ええ……元々はラインハルト様の側近になる予定だったのは彼の兄だったのです」

「へ……？」

「マークは……今でこそ優秀で、女性にモテますが、ラインハルト様を選ぶまでは、ベルンハルト家では落ちこぼれ扱いだったのです。だから、私もびっくりしましたよ。まだ三歳だったマークをラインハルト様が側近に選ばれた時には。マークの両親もラインハルト様のもとを訪ねたくらいです」

「あはは……小さい時のこと過ぎて、あまり覚えてないけどね」

嘘です。転生してから今までのことは全部記憶にある。

マークを拾ったのは、彼に魔法の才能がありそうだと、俺の鑑定魔法が告げていたから。

そして、案の定、俺がマークに魔法を教えると、みるみるうちに魔法が上達し、それまで凡才だった剣術も上達したのだ。

元々の家での扱いのせいもあってか、マークは俺が拾ったことに特に恩義を感じていて、俺への忠誠心が高い……というか、拾われたワンコのような状態である。

「そうだったのですね。ありがとうございますわ。ラインハルト様。マーク様のために」

「……？ え、ええ」

んー……？　なんでこの子がお礼を言うんだろう。もうちょっとで、誰か思い出せそうんだけどな……と黙っている。模擬戦が始まった。

「――はじめ！」

審判の声が訓練場に響く。

「まあっ！　すごいすわー！」

「うん。あのレベルの戦いになると何をやっているか分からないや。ラインハルトは分かる？」

ルイに問いかけられ、俺は序盤の攻防を説明する。

「まあ……一応ちよつとは。今は、相手の出方を窺っている段階だね。隙のない動きだ」

「うん」

しばらく見ていたら、試合に動きがあった。

まず、マークが相手に向かって、一歩踏み出し、切り込んでいく。その後、魔法を使い、相手の逃げ道を塞いだ。

マークにしては珍しく、セオリー通りのいい手だ。

「あれは相手の逃げ道を絞る動きだ。戦闘において、いかに相手の次の動きの選択肢を減らせるかは大事なポイントだ。だから、攻める側は、魔法で逃げ道を塞ぎながら追い詰める。逆を守る側は、逃げ道の選択肢を多く持てるように、魔法で逃げ道を作る。試合中盤では、そういう立ち回りを意

識しているね。終盤では詰めに入る」

「ほー。なるほど。そういう視点で見ると、行動の意図が分かってなかなか面白いね」

「うん。まあ……あれくらいハイレベルになると、考えが分からないことも多いんだけど。特に、周りの壁や障害物の使い方とか、武器の練度とか……そういったことは素人目だと読み切るのが難しい」

「そこら辺は、同じ騎士でも把握しきれませんからね。特にマークとかは、強くなりすぎて、彼自身の秘伝技も持っているくらいですから」

「まあ！　秘伝技！　素敵ですわね」

「そうですね。まあ……今回は見れなさそうですが」

アルバートがそう言うと同時に、マークが相手の首に剣を突きつけ、試合に決着がついた。どうやら、圧勝のようだ。

試合が終わり、勝ったマークが戻ってくる。

「リーア嬢。どうだった？」

「とっても素敵でしたわ！　剣技も見入ってしまいました」

「なら良かった。頑張った甲斐があったな」

マークを讃えるリーアに、アルバートが提案する。

「えーっと。どうせなら、残りの時間はお二人で過ごされてはいかがですか？　私たちは、神殿に

帰りますので」

「お気遣いありがとうございますわ、アルバート様。お言葉に甘えて、ぜひそうさせていただきますいですわ。良いですか？ ラインハルト様」

「う、うん。マークが良いんだったら俺は止めないよ」

しかし、二人きりで過ごすのを勧めるなんて珍しいな。

まあ、婚約者ができるマークにとっては、これが最後になるかもしれない。

——ん？ 婚約者？ そういえば、前回マークの婚約者騒動があったような……たしか名前はアメリア！ あっ！

「ああー！」

「ようやく気づきましたか」

「まさかリーア嬢がアメリア様本人とは。教えてくれないなんて人が悪いです」

「あら？ おそらく、あなただけですわよ。気づいてなかったのは」

「う……」

いたたまれない空気が流れる中、ルーカスが俺に話しかけてきた。

「ラインハルト、その件で話が……」

「なに？」

「今回気づかなかったのって、お前の恋愛運が十なのが原因だと思うぞ」

そういえば以前俺を転生させた女神ライフに会いに行った時に、俺の恋愛運が極端に低く設定されている話を聞いたような……

「つてことは、あのダメ女神の仕業か！」

……久々に、神界に文句を言いに行こうか。

エー君が元竜王からもらった神殿に入り、俺は真つ先に神の銅像の前に向かった。

ここはドラゴンの神殿とはいえ、祭壇がある。これなら、女神ライフのもとへ向かうことができる。

それにしても、ここの銅像のほうが、教会にあったものより神の見た目がリアルに感じるな。さすがは、神にもっとも近いとされている生物——古代竜が作ったものだけある。

「一応、私たちも一緒にについてあげてあげよう。今のあなたじゃ女神様に何をしかすか分からないし」

「うっかり、神界破壊されたら困るしな」

「お目付け役」

ラトリア、ルーカス、ソフィアが口々に言う中、俺は三体の姿を見て言い返す。

「とか言いつつ、ピクニックのような格好をしているし、ずいぶん楽しそうに見えるが」

「失礼ね。これは、神界に行く時の正装よ。私たちが動きやすい服装だわ。決して、野次馬根性の

表れではないのよ」

「神界ってそんなに動きにくい場所だったっけ？」

「あんたは神と同等の存在だから影響はないけれど、神族以外の私たちには特殊な装備がいるのよ」

「この装備だって、作るのに百年はかかるんだぜ。俺はスキル様につってもらったけど」
ソフィアも二人の言葉にうんうんと頷いているところを見ると、事実なのだろう。

「だから、ラインハルト。安心して護衛を任せてくれ！　ちなみに、俺はただの野次馬根性もある！」

「あ、あなたねえ！　その裏切りは反則よ！　いくら、ラインハルトがチョロいからってそんなにはつきり言ったら……あつ……！」

いや、はつきり言っただけでもなんとなくラトリアたちの目的には気づいていたけど。

「大丈夫。うちは、野次馬根性じゃない。純粹な興味。一緒にいける」

「あつ……！　ソフィア。あなたまで……！」

「ではラトリア」

「行ってくる」

そう言っただけで、ルーカスとソフィアが俺に近づいてきた。

「ちょ……あたしもついていくわよ！」

「み、みんな。あのさ……行く前に三人が面白半分なのかだけはつきりさせておきたいんだけど……」

「後にして！」

「えっ……？」

「行くぞ！」

俺の発言を待たずして、祭壇が光り出し、その光が俺たちを包み込んだ。

「いや、主人の扱い方雑——!!」

「やあ、いらっしやいラインハルト君」

神界に着くと、創造神のマテリア様が出迎えてくれた。

相変わらずイケメンだ。

辺りをキョロキョロ見回すが、お目当ての女神はまだいないようだ。

「ここにはライフはいないよ」

マテリア様がそう教えてくれる。

「そうですか。せっかく文句を言いにきたのに」

「あはは。ふむ。記憶を覗く限り、自分の恋愛運が十であることに気づいて、文句を言いにきたところかな。それから、まだ上手く魔法が使えないということも悩んでいると見た」

「そうですよ。まったく。色々大変です」

「あはは……！　今、ライフを呼び出したから。もうすぐ来るはずだよ」

「お気遣いありがとうございます」

「うん。それより、ラトリア。ソフィア。ルーカス。久しぶりだね。来ていたんだったら、顔を出しなさい」

ぴよこぴよこつと、俺の後ろから警戒するように、顔を出す精霊たち。

いつも、遠慮がなさすぎるくらい騒がしいので、ここまで大人しい対応は珍しい。

なんでだろう？

「お久しぶりです。マテリ様。あなたのおかげで、うまくやっているわ」

「そうか。それは良かった。——ところで、聞きたいことがあるんだけど、君たちはラインハルト君の異常な恋愛運の数値の低さにちゃんと気づいていたんだろう？　愛の精霊の話をしなかったのはなんでかな？」

ぎくりっ……！　と精霊たちが、肩を震わせる。

あれ？　もしかして、この精霊たち、何か大事なことを隠してた？　だから、記憶の読めるマテリ様を警戒して隠れていたとか？

「そ、それはですね。愛の精霊は、対象の恋愛運を倍にする力がありますが、今のラインハルトの恋愛運を倍にしたところで、それほど効果が見込めないというか。根本的な治療法にならないとい

うか……ともかく、そんな感じだわ」

「ど、ともかく、ライフ様に頼んだほうが、いい結果になるんだと考えたからだぜ！」

「は、激しく同意」

ラトリアが弱々しく説明し、その後ルーカスとソフィアが続く。

この動揺。自分たちが黒だと言っているようなものだけだ。

というか、愛の精霊なんてものがあるなら、神界に來ないで、そっちに向かったほうがよかったのでは？　やっぱり俺、精霊たちに遊ばれてた？

「ラインハルト君」

「ん？」

「この通り、精霊たちは扱うのが大変だろうけど、これからもよろしく頼むよ。ナイストライだね」

「そ、それ、負けた人にかける言葉です。せめて、勝つ前提で応援してください」

「あははっ……！」

そんなふうにマテリ様と話していると、「ぜえぜえ……」と息を切らしながら、女神ライフ様が走ってやってきた。

「ゼエゼエ……創造神様。どうなさいました？　って、あら。ラインハルト君。久しぶりね」

「お久しぶりです」

こちらの気も知らずに、元凶だった女神ライフ様かのんきに話しかけてくる。

「最近はどう？ 地上では上手くやれてる？」

「え、ええ……まあ」

あまりにのほほんとしすぎているライフ様を見たら、怒る気も失せてきた気がする。毒気を抜かれてしまったというやつだ。

「だめよっ！ 押されるんじゃないわ。ラインハルト」

「言ってやれ！」

「がんば」

だが、そんな俺にラトリアたちが後ろから応援の声をかけてくる。

俺は精霊たちに焚きつけられる形で、ようやく本題を切り出した。

「う……う、ライフ様！ あなたのおかげで、め、め、迷惑をしているんですっ！」

「んー？ 迷惑？ はて？ 私、なんかしちゃったかしら？」

素で「はて？」とかいう女神初めて見たわ！

そんなツツコミはさておき、ライフ様は本当に心あたりがない様子だった。

「ライフ様が、ラインハルトの恋愛運を十にしてみましたせいで、地上では大事故が起こっていたのよ」

「だからこうして直談判に来たんだ！」

ラトリアとルーカスがライフ様に向かって言い放つ。

ちよちよちよ……親切にフォローしてくれているようで、その言葉は俺を攻撃してないか？

別にお、俺は事故も起こしてないし、火傷^{やけど}したり、傷ついたりしてないからなっ！

「でも、ルイをほったらかしにしたり、明らかに不利益を被ってるじゃない。自覚がないのは重症者の証よ」

「ぐぬぬ」

ラトリアの言葉に思わず唸っていると、俺たちの話を聞いていたライフ様が口を開いた。

「えっ!? 何があったの!? 詳しく教えてくれる？ ——って、あいてっ！」

「お前な。もう少し、地上に関心を持て。ラインハルト君の様子をもっと見ていれば、そこに疑問を持たないはずだぞ」

「だって。ちゃんと動向を追いたくても、創造神様が仕事を押し付けるせいで、暇な時間がないんですよー！」

「それはお前が、この前来た転生者のことで、また重大なミスをおかしたからだろうが……！ むしろ、お前のフォローに回ってる俺のほうがもっと忙しいわっ！ 大体お前は、いつも——」

あ、お説教が始まってしまった。

というか、ライフ様。また、やらかしていたのか。

話が終わるまで待っていると、マテリ様が咳払いをしてから俺たちに向き直った。

「ごめん、ええつと……ところで、ラインハルト君。申し訳ないんだけど、今のライフに恋愛運を上げるだけの力はないんだ。俺たち他の神も、君を直接転生させたわけではないから関与できない。俺から、愛の精霊に頼んで数値を上げてもらうという応急措置的なことはできるけど、それでも常人並みにはならないな」

「そ、そうですか。それでも十分なのですが」

こっちとしては今より数値が上がればまだいい。

そう思っていたが、マテリ様は俺の言葉を無視して話を続ける。

「まあ、落ち込むのはまだ早いよ。方法は他にもある。むしろ、そう——こっちのほうがいいんじゃないかと思えるくらい、素晴らしい案が」

「えっ……？　なんですか!？」

いったいどんな方法だろうか？

もったいぶるマテリ様の言葉に、俺は思わず食いつく。

「それはね……君が女神ライフより偉い神様になってしまえばいいんだ。うん。言ってるなんか、だんだんそれが一番良い気がしてきた」

「へっ……!？」

ライフ様が間の抜けた声をあげた。

俺もマテリ様の言葉を聞いて衝撃を受ける。

「そんなことできるんですか……!?　具体的には、どういった方法で？」

「そうだな。ラインハルト君の実力なら、この世界の時を止めて、十年ほど仕事するだけで追い抜かせる気もする」

「へ？　それだけ？」

「それだけ。少し想像してみてください。女神ライフのこれまでやってきた仕事量の多さを」

「た、たしかに。なんかこなせそうな気がします」

俺が少し乗り気になっていたら、ライフ様が抗議の声を上げる。

「ちよちよ……!　それで納得するのは失礼だわ、ラインハルト君。それに、勘弁してくださいよマテリ様。その冗談は心臓に悪いですって」

「いや、冗談じゃないんだけど」

「へ？」

「むしろ、かなり大真面目に提案していたつもりだ。はあ……ライフは、これでもまだ今回の件の事の重大さが分かってないみたいだな。罰として、さらに仕事五割増だ」

「そ、そんな！　ラインハルト君。代わりにどう？」

「そういうことをしているから、マテリ様にさっきみたいな提案をされるんですよ。ライフ様」
「う……」

ライフ様は落ち込んだ様子を見せた。

少し気の毒に感じたが、同時にもう少し落ち込んでほしいとも思う。

「——ところで、ラインハルト君」

「なんですか？ マテリ様」

「女神ライフより偉くなる方法は、一応他にもあるけど難易度が高くてね。ちなみに、先ほど言った仕事量を達成するやり方は、十年分を一気に終わらせなくてもいい。たまにここへ来た時、コッソツ進める形でも十分だから。地上での生活への影響もそこまで出ないと思うよ」

「……！ なるほど」

その説明を聞くと、かなり好条件な気がする。やらない手はないか。

「——というわけで、今から、少しずつ仕事をこなしていくことも可能だけどどうかな？ もちろん、突然の提案だしラインハルト君のほうで少し考えてからでもいいんだけど」

「い、今からですか？ うーん。すぐに決めなくてもいいんですもんね。ちよつと持ち帰ります」

「うん。いつでも大歓迎だ。待っているよ。おっと、話していたらもう時間がきてしまったね」

「マテリ様。また来ます。その時に」

「うん。まあ、君のしたいようにするのが良いよ。軽く提案したけど、合計で十年友達と離れるって結構長いからね」

「はい」

「それから、時間ができたら愛の精霊には会いに行ったほうがいいよ。俺からも話を通しておくか

ら。あ、それと言い忘れていたけど、知識神のノートが君の弟君のことを気に入ってみたಿದೆね。なにやら加護をあげたみたいだ。教えるのが遅くなってごめんね。それじゃあ」

一方的にとんでもないことを言われた気がする。

「マテリ様、そういうのはもっと早く——」

そう言うのと同時に、詳しい話を聞くこともできないまま俺たちは地上へ戻されたのだった。

「おかえり。ラインハルト。晩御飯できてるよ」

「ただいま。ルイ。ありがとう」

神殿に帰ると、晩御飯の良い香りが漂っていた。

この神殿は、なぜか結構いいキッチンが備え付けられている。

竜が自分で料理するとも思えず、何のためにあるのかは本当に謎だが。

『おう。お前ら帰ったか。お疲れ様じゃの』

「エー君。また、そんなに飲んで……」

『そうでもないぞ。まだいつもほどは酔っておらんからのう』

「今日もいつも通り酔うまで飲むつもりかい！ まったく……酔っ払いのそんなに飲んでないっていう主張ほど信用できないものはないな」

『もちろんだ。というか、そうつれないことを言うな。こっちだって、首を長くして待っていたの